

## 掛田駅 軌道開通記念碑について

掛田駅構内東にひっそりと「軌道開通記念碑」が建立されています。  
山を切り開くために非常に困難な工事となった保原～掛田間の線路を、必死に開通まで導いた先人の苦勞を偲んで、大正8年に掛田町が建立したものとされています。  
石碑の文面は漢文でしたためられておりますが、分かりやすく翻訳すると概ね以下のような内容となります。

## 掛田駅 軌道開通記念碑 訳文

掛田町は伊達郡の中央に位置し、昔から経済の中心としても栄え、商業や養蚕が盛んであり、特に「掛田生糸」は世界的にも有名な品物である。

しかし周囲を山に囲まれ、交通の不便な場所であり、さらなる繁栄を阻害しかねることが、地元の心配事となっていた。

そこで日本軌道株式会社の社長 雨宮敬次郎氏が地元の有力者と共に鉄道会社を設立することにより、信達地区に路線を敷いてはどうかと、当時の掛田町長 大橋佐兵衛氏に持ち掛けた。

さらに安田常作氏などと共にその実現を目指し、明治39年11月19日に実地調査を行ない、掛田までの線路敷設が実現することになり、町民は大歓迎に沸いた。

当時の伊達郡長であった馬場直人氏も、国利に繋がる事業であるとこれを称えて日本軌道株式会社と協定を結んで工事費用を確保し、明治40年2月に工事に着手した。  
掛田線はいち早く工事が始まり、明治41年4月には当時の掛田町長 菅野賢助氏が町議会に諮り、工事費用1,200円と工事作業員500人を確保し、保原～掛田間の山間地を切り開き、線路用地の工事を進めた。

その頃すでに福島～湯野間の軌道線は開業しており、長岡～保原～梁川も追って開通、しかし保原～掛田間は山間地のため工事が難航していた。

そこで明治42年2月に大橋伊三郎氏が期成同盟会を組織し臨時掛田町長代理に就任、この年8月には佐藤源兵衛氏が掛田町長に就任、工期の遅れを憂慮し日夜東奔西走し、世論をも巻き込んで事態の打開を図った。佐藤幾之助氏、大内虎之助氏、金谷重郎治氏などの応援を得て伊達郡長に陳情するとともに日本軌道株式会社とも交渉し、補助金の確保に成功。軌道線の再改修の計画を立て、明治43年2月17日に取場山に於いて地鎮祭を開催、あらためて線路工事を起工した。

更に岩盤を削り、峰を均し、谷に堤を築き、道路を拡張し、畳石を敷き、川には橋を架け・・・必死に作業を進めたものの、取場山の開墾は最難工事で行進せず、そのため工事費用が不足していたが、困難を耐え忍び、協同の努力を惜しまず、忙しく工事

を進め、期間にして19カ月、工事費用は15,000円の赤字となったものの、道路の新設1,350間(けん)、盛土1,300坪、切土2,500坪、岩石掘削3,000坪、暗渠42カ所、橋梁7カ所、眼鏡橋1カ所、取場山の開削27尺(長さにして100間余り)、道路敷地の買収3町歩余りと、小さい一町村としては到底成しえない工事であった。

掛田町では同時期に校舎の増築事業や水害復旧工事が重なり、加えて桑の不作の影響により財政的に厳しい状況になっていたため、掛田線工事完了後は伊達郡への寄付として取り扱われた。

明治44年4月8日に亀岡神社において竣工報賽会を開催、翌日開通祝賀会が茶臼山公園にて挙行された。

想えば、富強の基本は国土を切り開き、物流を盛んにすることにある。

取場山を切り開いたことにより軌道線がさらに川俣町まで延長されることになり、交通の便が良くなり益々物流が盛んになった。経済的にも勢いが付き、人々を奮い立たせ、発展の機運が高まってくる。

軌道線の建設は困難を極めたが、その後に得られるものは、それを補っても余りあるものである。なんと楽しいことではないか。

そして町議会の議決により、記念碑を建てることとした。

先人の苦勞を想い、その由来と概要を叙べて後世に伝える。

大正8年4月 榊園 懸田訓平 編集